

99 片浜十三里 長く続く砂浜

日出の石門の東方から主に渥美層群の海食崖が連続する直線的な海岸が約 50 km（渥美半島先端から浜名湖まで）続いており、「片浜十三里」・「表浜」とよばれています。



片浜十三里で見られる砂浜は、ほとんどが細-中粒砂からできており砂礫も混在しています。浸食によって砂浜も幅が狭くなっています。流出する川は小河川しかありません。

左の写真は日出の石門の上から撮ったもので、左側が 1979 年、右側が 2014 年のものです。侵食の様子がわかります。

城山は秩父帯のチャートからできています。



貝ボタの断面

◎貝ボタ

太平洋に面した表浜は度々地震による津波の被害を受けています。1854 年の安政東海地震で大きな津波被害を受けた後、田原市堀切地区では津波対策として貝殻を利用した「貝ボタ」や「かいがらぼた」と呼ばれる堤防が築られました。住民たちが食べた貝の殻を土砂に混ぜて作った堤防(左図)で、海岸沿いに約 2.5km ありました。現在は洪水や道路の拡幅などにより大部分は失われてしまいましたがごく一部見ることができます。表浜は強い波浪で根元が削り取られるとその上位部分が崩落して崖が形成され、海に対して後退を続けてきています。東部の豊橋市域では海食崖

の高さが 70～80 m あり、崩落した土砂と天竜川河口からの沿岸流で運ばれ堆積した土砂が広い浜を形成し、近年は赤ウミガメの産卵地として知られており、海岸に降りる道も車の通行が禁止されるところが増えています。かつてはこの砂浜は地曳網の場で漁村が段丘崖下にいくつも形成されていたそうですが、1707 年の宝永地震に

よる大津波で浜の漁村が壊滅し、台地の上へ移転することになりました。海食崖は旧赤羽根町あたりで次第に低下し、津波の影響を受けやすくなっています。



◎伊良湖東大寺瓦窯跡 伊良湖町瓦場 初立池南西端

平安から鎌倉時代の渥美古窯の一つで、3基の^{あながま}窖窯（丘陵の斜面をトンネル状に掘り抜いて作られた原始的な焼き物用の窯）が保存されています。1180年の平重衡による焼き討ちにより焼失した東大寺を再建した時の瓦を焼いた窯があった場所です。東大寺鎌倉再建のための瓦が渥美で焼かれ、海を渡り奈良に届けられました。伊良湖町にある窯跡は、『伊良湖東大寺瓦窯跡』として保存されています。国指定史跡で、「東大寺大佛殿瓦」と刻印された軒丸瓦や軒平瓦、平瓦などの瓦や瓦経、瓦塔などの宗教用具が出土しています。

参考文献

村松憲一，2019，愛知県の地質とジオサイト 人と大地との関わり 第二版.189p.

中島 礼・堀 常東・宮崎一博・西岡芳晴，2008，豊橋及び田原地域の地質．地域地質研究報告

（5万分の1地質図幅），産総研地質調査総合センター，113 p.

中島 礼・堀 常東・宮崎一博・西岡芳晴，2010，伊良湖岬地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），産総研地質調査総合センター，69 p.

【村松憲一】